

# 活 動 報 告

## 共同研究グループ活動報告（2017年度）

### 日中関係史

メンバーの多くが神奈川大学共同研究奨励助成の共同研究「日中関係史と学知の交流——中国人留学生を中心に」に参加している。このため本年度は以下の通り、中国人留学生史研究会と研究活動を共にした。

1. 研究会例会の開催：2017年4月22日、6月24日、9月30日、12月17日、2018年2月3日
2. 拡大例会の開催：2018年3月3日「中国人留学生が直面した諸問題について」、3月25日「近代日中関係と留学生文学」（予定）
3. 国際シンポジウムへの参加：2017年5月20日、中国大連 遼寧師範大学「東亜教育交流視野下的中日留学生史研究」、2017年8月26～27日、中国天津 南開大学「第二届“留学生与中外文化”国際学術研討会」

来年度は神奈川大学で日中関係と留学生に関する国際シンポジウムを主催する予定であり、その研究成果を研究書としてまとめる計画を進めている。また研究グループ単独の講演会なども行いたいと考えている。

（文責 中村みどり）

### 色彩と文化Ⅳ

「言語景観」を外国語教育に応用できる方法を中心に研究会活動をすすめている。

#### (1) 研究会の開催：

日時：11月20日（月） 16：30～18：00

発表者1：小林潔（本学非常勤講師）

テーマ：「ロシアの言語景観とロシア語教育への応用——アストラハンでの実例をもとに」

発表者2：尹亭仁（本学教員）  
テーマ：「ソウルの言語景観と韓国語教育への応

用——地下鉄2号線の駅名の漢字表示を中心」

#### (2) 海外調査

小林潔は、2017年8月24日～9月2日までロシア連邦アストラハン市に滞在、アストラハン大学留学生露語教育担当者との面談、日本語学校訪問、言語景観の調査などを行なった。言語景観関連では、交通機関・公共機関におけるロシア語を中心とした言語使用状況を調査した。これは実際の言語使用を踏まえた言語教育に繋がるものである、と報告している。

佐藤裕美は、2018年2月3日からオーストラリアのタスマニアに出張を予定している。タスマニアで英語教育に応用できる看板や禁止表示など英語の景観を調べる計画である。

尹亭仁は、2017年10月26日～29日の4日間ソウルに滞在、地下鉄2号線の駅名の漢字表示を中心に景観について調査した。調査の中間報告として11月20日に研究会で発表を行なった。

2018年度より調査の結果を研究会で発表するなど、共同研究を本格化していく予定である。

（文責 尹亭仁）

### 言語変異研究

1. 研究内容：今年度は主に言語と社会の関係に関する総合的な研究を行った。特に歴史的言語景観に関するテーマと異文化語用論のテーマに関する調査研究と論文執筆を行った。

#### 2. 今年度の主な研究成果：

(1) 「百年前ころの上海の景観言語と景観文字の記述研究」『人文学研究所報』No 59

神奈川大学人文学研究所 2018年3月

(2) 「上海の都市形成期における言語景観——歴史社会言語学の事例研究」『神奈川大学言語研究』No 40 神奈川大学言語研究センター 2018年3月

- (3) 「日中命題モダリティの異文化語用論の探究——「過剰含意」発生のメカニズム」『社会言語科学』Vol. 21-No. 2 日本社会言語科学会 2018年9月（予定）
3. 今年度の研究所所蔵資料の収集：  
『宋画全集』第5巻(1, 2冊), 『元画全集』第3巻(2, 3冊), 第5巻(3, 4冊)
4. 2018年度も引き続き歴史言語景観と異文化語用論について研究調査を実施する予定である。  
(文責 彭国躍)

### 〈身体〉とジェンダー

1. 講演会・研究会の開催
  - ・研究会立ち上げミーティング  
開催日：2017年4月12日（水）  
会場：17-215
  - ・第1回研究会  
開催日：2017年9月27日（水）  
会場：17-216  
発表者（所属）：熊谷謙介（外国語学部・国際文化）  
演題：「ジャンヌ・ダルクからジュピターへ——戦後フランスの男性権力表象」
  - ・第2回研究会  
開催日：2018年1月24日（水）  
会場：17-216  
発表者（所属）：太田貴（技能実習生制度監理団体職員, 本学外国語学部・国際文化交流学科OB）  
演題：「「結婚できない男性」が国際結婚で「男」になる——日比国際結婚研究にみる日本人男性のディスコース」
  - ・第3回研究会  
開催日：2018年1月31日（水）  
会場：17-216  
発表者（所属）：シモン・サルブラン（外国語学部・国際文化）  
演題：「同性婚反対運動とフランスにおける反動論の新しい姿」
2. シンポジウムの開催 なし
3. 活動内容

〈身体〉とジェンダー研究会は『68年の〈性〉』を2015年度に出版したが、その後に続く企画を打ち立てるべく、4月12日にミーティングを行い、男性表象をテーマにした叢書の出版（2018年度）を目指して発表を組織していくことに決まった。第1回研究会ではフランス大統領を中心とした男性権力表象をテーマに発表・ディスカッションが行われ、その成果は『神奈川大学評論』第88号に寄稿された論考となった。第2回研究会では結婚社会学・多文化共生の分野から、女性に比べてあまり注目されてこなかった、フィリピン人女性と結婚した「日本人男性」が分析された。そして第3回研究会では、社会学の観点から、フランスで2015年に可決した同性婚に対する反対運動が論じられた。来年度は文学・芸術における男性表象についても目を向けることで、男性学と平行して徐々に脚光を浴び始めている男性表象論を形にしていきたいと思う。

(文責 熊谷謙介)

### 自然観の東西比較

1. 講演会・研究会の開催
  - 第1回研究会  
開催日：2017年4月26日（水）  
会場：17-216  
発表者：坪井雅史（神奈川大学外国語学部教授）  
演題：長州捕鯨と、近代捕鯨基地としての下関についての調査報告
  - 第2回研究会  
開催日：2017年5月24日（水）  
会場：20号館, 20-417A（大学院演習室）  
発表者：村井まや子（神奈川大学外国語学部教授）  
演題：〈飼い馴らされた〉自然——エイミー・スタインの写真が語る動物との遭遇をめぐる現代のおとぎ話
  - 第3回研究会  
開催日：2017年6月21日（水）  
会場：17-216

発表者：上原雅文（神奈川大学外国語学部教授）、坪井雅史（同）、大川真由子（同大学准教授）、伊坂青司（同大学教授）

演題：来年度刊行の「叢書」論文の内容についてそれぞれ報告、および議論

#### 第4回研究会

開催日：2017年7月27日（水）

会場：17-315

発表者：鳥越輝昭（神奈川大学外国語学部教授）、山本信太郎（同大学准教授）

演題：来年度刊行の「叢書」論文の内容についてそれぞれ報告、および議論

#### 第5回研究会

開催日：2017年9月27日（水）

会場：17-315

発表者：村井まや子（神奈川大学教授）、小熊誠（同）

演題：来年度刊行の「叢書」論文の内容についてそれぞれ報告、および議論

#### 第6回研究会

開催日：2017年10月25日（水）

会場：17-216

発表者：中林広一（神奈川大学准教授）

演題：中国の「自然観」とその前提——「関係」と「公共」の関わりを起点として

#### 第1回講演会

開催日：2017年11月29日（水）

会場：3号館401号室

発表者：八幡さくら（東京大学大学院「多文化共生・統合人間学プログラム」(IHS)・特任研究員(PD)）

演題：シェリングの風景画論における調和的統一——自然精神と音楽的統一

#### 第7回研究会（予定）

開催日：2018年3月7日（水）

会場：17-216

演題：自然と世界史のなかの神々

#### 第8回研究会（予定）

開催日：2018年3月30日（金）

会場：17-216

演題：イギリスの自然観調査の報告

## 2. シンポジウムの開催

なし

### 3. 活動内容

本研究グループは、2015年度から神奈川大学共同研究奨励助成金の交付を受け、研究計画に沿って活動している。本年度が助成金交付の最終年度であり、研究の総括として、来年度刊行予定の「叢書」に執筆する論文の構想について各自が発表し、内容と構成について議論した。また、通常の研究会、グループ外の研究者を招いての研究会、研究調査およびその報告会も実施した。外部講師を招いての講演会は1回開催し、学生や大学院生の参加もあり、活発な議論が交わされた。研究グループの研究の進展にとっても研究の公開の意味でも大変有益であった。

（文責 上原雅文）

## ヒト身体の文化的起源

### 活動内容

① 人間の身体を系統的に辿り、その根源を考察することで、身体が持つ機能的な意義を検討した。

I 関節運動を増幅するアキレス腱の屈曲点について調査・研究を進め、下記の論文を執筆した。この論文は現在、審査中である。

・ A Multi-modality Approach Towards Elucidation of the Mechanism for Human Achilles Tendon Bending During Passive Ankle Rotation.

また、下記の学会での発表を行った。

・ アキレス腱の湾曲を考慮した腱スティフネスの評価。第72回日本体力医学会（松山大学@松山市、平成29年9月16日-18日、2017）

さらに、下記の研究会で話題提供を行う。

・ アキレス腱の湾曲のメカニズムと機能的意義。3rd Muscle Biomechanics Imaging seminar（札幌医科大学@札幌市、平成30年2月17日、2018）

（文責 衣笠竜太）

## 帝国とナショナリズムの言説空間

### 1. 研究会の開催

- 第1回：2017年6月17日（土）：午後4時～6時  
 場所：17-401号室  
 （横浜キャンパス・人間科学部社会コース共同研究室）  
 講師：松本和也氏（神奈川大学外国語学部教授）  
 発表論題：「文学（者）からみた軍政下  
 シンガポール  
 ——井伏鱒二『花の町』を  
 手がかりに」
- 第2回：2017年11月18日（土）：午後4時～6時  
 場所：17-401号室  
 （横浜キャンパス・人間科学部社会コース共同研究室）  
 講師：関根康正氏（関西学院大学社会学部教授）  
 発表論題：「ストリート人類学の挑戦  
 ——ロンドンの南アジア系移民の場合」

## 2. 活動内容

2014—2016年度神奈川大学共同奨励研究助成金「帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携の総合的研究」の成果として、神奈川大学人文学研究所叢書『帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』（御茶の水書房）を2017年度末に刊行を予定している。

（文責 永野善子）

## NCH新聞研究会

- 研究内容：本研究会は、神奈川大学が所蔵するNCH（North China Herald）新聞（ONLINE版）の日本、中国、韓国、東南アジア諸国に関する新聞記事の研究を目指している。
- 活動内容：研究会の構成員が『良友』画報研究会 <http://liangyou.jugem.jp/>、中国人留学生史研究会 <http://chineseovers.jugem.jp/>と重複するため研究会単独での活動は活発ではなく、10月28日にワークショップ「上海租界と外国人社会について」を共同開催するだけであった。2018年度はより活発な活動を展開したい。

- 日時：2017年10月28日  
 場所：神奈川大学横浜キャンパス3号館406室  
 主催：神奈川大学『良友』画報研究会  
 共催：神奈川大学非文字研究資料センター・上海社会科学院歴史研究所・NCH新聞研究会  
 司会：孫安石（神奈川大学）  
 (一)「上海のユダヤ人研究の最新動向について」王健（上海社会科学院歴史研究所）  
 (二)「日本軍政下の上海におけるユダヤ絶滅政策の存否をめぐって」菅野賢治（東京理科大学）  
 (三)「上海のフランス語新聞 Le Journal de Shanghaiにおける日・仏・中文化交流」趙怡（東京工業大学非常勤）  
 (四)「ドイツの版画と上海の魯迅」東家友子（東京大学大学院博士後期課程）  
 【質疑応答】熊谷謙介（神奈川大学）、大橋毅彦（関西学院大学）、菊池敏夫（神奈川大学）、石川照子（大妻女子大学）  
 （文責 孫安石）

## 声の文化

- 今年度は以下のとおり研究会を2回実施した。  
 日時：7月5日（水）17:30-19:00  
 場所：人文学研究所資料室（17-216号室）  
 報告者：渡部かなえ（本学人間科学部教授）  
 タイトル：人の声（Vocal）が持つ力  
 日時：10月4日（水）17:30-19:00  
 場所：人文学研究所資料室（17-216号室）  
 報告者：深澤徹  
 タイトル：現実界（ル・レエル）の〈声〉を聞く。  
 ——ラカン理論の応用で『方丈記』テキストを読んでみたい——

来年度は前期と後期に研究会を実施することに加えて、外部講師による講演会の開催を予定している。

（文責 村井まや子）

## 日韓対照言語研究

「日韓対照言語研究」は「日韓両言語におけるヴォイス・テンス・アスペクト・モダリティの対照研究」を当面の課題として掲げ、研究活動をすすめている。

### (1) 研究会の開催

日時：12月14日（木）16：30～18：00

発表者1：高木南欧子（本学教員）

テーマ：「否定の表現について」

発表者2：尹亭仁（本学教員）

テーマ：「「V一である」に対応する韓国語の表現について」

年2回以上の研究会を計画しており、来年度は日本語を軸に対照言語研究の観点から研究対象を中国語やスペイン語などの「テンス・アスペクト」にも拡大する予定である。また海外の対照研究を行なっている研究者にも声をかけ、研究発表を依頼する予定である。

（文責 尹亭仁）

## 各国近代文学の研究

### 1. 講演会・研究会の開催

#### 第1回研究会

開催日：2017年10月4日

会場：17-315

発表者：熊谷謙介

（神奈川大学外国語学部准教授）

中村みどり

（神奈川大学外国語学部准教授）

古屋耕平

（神奈川大学外国語学部准教授）

松本和也

（神奈川大学外国語学部教授）

演題：（共通テーマ）

各国近代文学研究の現状と展望

#### 第2回研究会（講演会）

開催日：2017年11月29日

会場：20-433

講演者：八木君人（早稲田大学文学学術院）

演題：初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場

### 2. 活動内容

本研究グループは、今年度から活動を開始した。研究対象の時期的な重なりを基軸に据えながらも、研究をめぐる方法や環境・場の異なりについて相互に意識し、意見交換をしながら、領域横断的な近代文学研究の方向性を模索していく。今年度は、第1回研究会において、メンバー全員がそれぞれの専門の立場から現状を報告し、それに即した意見交換を行った。また、講演会では、ロシア文学を専門とする八木君人氏を招いて、「初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場」という演題でご講演頂いた。

（文責 松本和也）

## 知覚認知システムの普遍性と多様性

講演会・研究会の開催：

開催日：2018年2月20日（木）15：00～16：30

会場：25号館301室、講演者（所属）：岡嶋克典  
（横浜国立大学大学院環境情報研究院教授）

演題：「質感の視覚科学と画像工学」

シンポジウムの開催：なし

### 活動内容：

本研究グループは本年度9月に人間科学部の吉澤、前原、松永（敬称略）の3名で発足した。

この研究グループは、人の知覚・認知の仕組みについて、研究することを目標としており、特に、知覚的様相や認知的様相に共通な普遍性とそれらの様相の相互効果によって展開した多様性を現象・行動観察や計算論的解析などを通して明らかにする活動を行うために共同で取り組んでいる。発足後間もないため、共同研究での成果はまだないが、メンバーがそれぞれに目標に向かって以下の研究活動を行なった。その概要を述べる。

吉澤は運動対象を視覚的に検出する仕組みについて心理物理学実験を行い、これまで検出信号と考えられていなかった主観的輪郭の情報が有効に機能していることを示し、国際会議（European Conference on Visual Perception）において報告した。

前原は、片眼弱視患者と健常者の眼間運動速度マッチングという課題を用いた心理物理学実験の結果から両者に課題に対するパフォーマンスの差がなく、弱視患者は闇上の運動視処理には障害がないことを国内会議（日本視覚学会 2018 年冬季大会）において報告した。

松永は、音楽文化の異なる聞き手の調性知覚を直接比較し、日本人、中国人、ベトナム人、インドネシア人、アメリカ人の調性知覚が文化によって異なることを実証し、国際会議（The 6th Conference of the Asian-Pacific Society for the Cognitive Sciences of Music）において、その成果を報告した。

これらの研究成果をもとに今後、共同プロジェクトなどを通してグループの目標とする課題を解明する予定である。

（文責 吉澤達也）

## 講演会要旨

1. 開催日 2017年5月26日（金曜日）
2. 会場 3号館307号教室
3. 講演者 与那嶺一枝氏（沖縄タイムス社編集局次長兼報道本部長）
4. 演題 沖縄で起きていること、メディアが伝えていること

講演では、与那嶺一枝氏に沖縄で起きていること、沖縄の新聞『沖縄タイムス』の報道本部長として日々の報道現場で見聞きしたことや考えていることを語ってもらった。

与那嶺氏は米軍に関連した具体的な事件・事故を取り上げ、沖縄のメディアがどのように取材し、報道しているかについて『沖縄タイムス』を事例に紙面や写真を示しながら説明していた。特に、沖縄の節目となった1995年に起きた米兵による少女暴行事件、そしてその後の沖縄国際大学へのヘリ墜落事故（2004年）、米軍軍属による女性暴行殺害事件（2016年）、オスプレー墜落事件（2016年）など、具体的な事件・事故を取り上げ、その概要や背景、取材の様子や沖縄と在京メディアとの報道の差異などをについて説明した。

また、与那嶺氏は「沖縄県知事の仕事の7割は基地問題に割かれる」という元県知事の言葉を紹介しながら、沖縄で繰り返される米兵・軍属による女性への暴力事件などの事件事故、その度に大規模な抗議集会、そして約束を守らない米軍の実態、米軍に関しては日本と異なるルールが存在することなどを解説した。さらに、進行中の東村高江のヘリパッド建設地や名護市辺野古の新基地建設現場、そして米軍基地に反対する市民に対して起きていることや警備をめぐるトラブルなど、米軍基地をめぐって起きていることの現状も報告した。その上で、「本土」で伝えられる沖縄の米軍基地をめぐる誤解・デマなどを紹介し、沖縄と「本土」との温度差なども語った。

会場には研究所のメンバーのほか、神奈川大学の学生や教職員、学外からの参加者もみられた。中には、もっと深く沖縄で起きていることを知りたいと、修学旅行で沖縄を訪れた近隣高校生の参加者もいた。在京の放送や新聞などメディア関係も参加し、沖縄のメディアの状況や在京メディアとの報道の差などについて議論もなされた。

（文責 後田多敦）

1. 開催日 2017年7月18日
2. 会場 3号館B103号室
3. 講演者 寺田新先生（東京大学総合文化研究科）
4. 演題 スポーツ栄養～基礎から最前線まで～
5. 講演内容

“You are what you eat.”という栄養学の基本的な考え方から、スポーツの現場において、具体的に「何を」、「どのくらい」、「どのタイミングで」摂取すべきなのか、を東京大学の寺田先生にご講演頂いた。運動後の栄養補給は、運動中に減少した筋グリコーゲンの回復、およびタンパク質の合成を促進する上で重要な役割を果たす。特に、同じ日に何試合もこなす必要のあるスポーツ競技においては、糖質を運動終了後すぐに摂取することで回復を早めることができる。ただし、翌日以降まで試合等が行われない場合、つまり筋グリコーゲン回復のための時間が十分にある場合には、運動終了直後に急いで糖質を摂取する必要はないことも示されている。また、日常的にトレーニングを行なっている競技者は、1日にタンパク質を体重1kgあたり2g摂取する必要がある。アミノ酸組成の違いから、動物性のタンパク質の方が植物性のタンパク質よりも好ましい。さらに、これまでスポーツ栄養の分野では重要視されてこなかった、脂質が筋萎縮を抑制する効果を持つ可能性についても報告されている。

運動と栄養補給については古くから研究されてきたテーマではあるが、未だ検討の余地が多く残されている。特に、栄養素を単独で摂取した際の効果に関する研究がほとんどであり、栄養素の組み合わせによる効果についてはまだまだ謎が多い。例えば、最近では糖質と牛乳を同時に摂取することで、糖輸送体を細胞膜上へと移行させるインスリンの分泌が刺激され、筋グリコーゲンの回復が促進されることが報告されている。栄養素の組み合わせは無限に近く存在するため、今後さらなる研究が必要だと考えられる。また、近年スポーツ科学の分野ではトレーニングによる骨格筋の適応の分子レベルでのメカニズムの解明が進んでおり、それに伴って新たに数多くのスポーツ栄養学的手法が考案されてきている。一方で、最近注目されている糖質制限食やケトジェニックダイエットなどについて、それぞれリスクがあることに十分な注意が必要である。

(文責 北岡祐)

1. 開催日 2017年11月29日
2. 会場 20号館433室
3. 講演者 八木君人氏（早稲田大学文学学術院）
4. 演題 初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場
5. 講演内容

共同研究グループ：各国近代文学の研究では、文字通り「各国」の研究状況とその方向性等々を多角的に検討していくことを目指している。今回は、現メンバーでは補えない領域である、ロシア文学をご専門としている方として、八木君人氏（早稲田大学文学学術院）をお招きして、「初期ソヴィエトの文芸学・文芸批評の場」と題して、ご講演を頂いた。

まず、八木氏は、ロシア文学・文化研究をめぐる研究（学会）状況について、日本およびロシアの視点からパースペクティブを示した上で、ご自身のご専門について話題を移した。

八木氏の主たる関心領域である、ロシア・フォルマリズムについて、まずは事典類での説明のされ方が示された。この文学運動について、主要関係人物や、主な手法、運動の帰結（弾圧／構造主義への影響など）について、最大公約数的な評価を確認した上で、モスクワとペテルブルグという2つの中心があつたことを指摘しながら、人的・地理的な動きと関わらせながらその動向を説明された。

その上で、八木氏は研究上の問題関心を、次のように示された。——文学をめぐる興味は、いわゆる感動と称されるものによるところが大きいと思われるが、にもかかわらず、なぜロシア・フォルマリズムに関わった人々は、詩学へと向かったのか。ここには、もとより研究者それぞれの、さらには文化的政治的背景も関わるだろうが、この問い合わせ明らかにするために、八木氏によって豊富な引用が示された。そこでは、ロシア・フォルマリズムを担った主要な人物たちによる、すぐれて方法論的な議論にくわえ、社会や生活をめぐるごく素朴な感懷なども示されており、八木氏はそれらを読み解きながら、ロシア・フォルマリズム生成のモチベーションをしなやかに探りながら、それぞれの言説を意味づけていった。

今日、形式主義的な文学理論と目されがちなロシア・フォルマリズムの背後に、動的かつ多様な要素が当事者達の間にあったことを、あざやかに浮かびあがらせるご講演であった。

(文責 松本和也)

1. 開催日 2018年1月17日 18:30-20:00
2. 会場 神奈川大学横浜キャンパス3号館202号室
3. 講演者 木内久美子（東京工業大学 リベラルアーツ教育研究院 准教授）
4. 演題 1930年代から1960年代前半の日本映画にみる「月島」の地政学  
——ノスタルジーと政治的無意識——
5. 講演内容

この講演は、戦中から戦後（1960年代前半）にかけて「月島」で撮影されたシーンを含む日本映画の分析によって、「月島」をめぐる「ノスタルジー」の多面的構造を解読する試みである。

月島とは、狭義では1892年（明治25年）に完成した東京湾の埋立地（「月島一号地」）を指し、周辺の佃島、勝鬨、晴海と区別される。だが広義の「月島」はしばしば佃島をも包括する地域名として用いられており、今日この地域を知らない人々は二つの島をしばしば混同している。

埋立地は戦前、陸地側からみて「川向こう」と呼ばれ、貧しい地域として認識されていた。この証拠となる映像表現が当時の映画にも用いられている。だが戦中、東京の東側が空襲で延焼したのにたいし、「月島」地域はその被害を免れた。その結果戦前からの長屋が多く残り、その風景が佃の渡しのポンポン船（蒸気船）とともに、1950年代の東京下町の風景として映画で用いられた。

佃の渡しは、当時、隅田川に残っていた唯一の渡しであり、移動手段はバスや都電に移行していた。ポンポン船のある東京生活は戦前・戦中の日常風景であり、アナクロニックな表象であったといえる。

この講演ではここにみられるようなアナクロニズムの諸相を、一方では「ノスタルジー」への無意識的欲求、他方では東京湾の埋立地という地政学的視点との関係から探ってみたい。

具体的には「ノスタルジー」の構造に示唆を与えてくれる新藤兼人『縮図』（1953）における翻案の手法や新藤自身の言説を分析する。この映画にみられる「ノスタルジー」の構造は、実は必ずしも同時代の別の映画監督（成瀬巳喜男、小津安二郎、川島雄三など）に共有されているわけではない。複数の映像を比較することによって、今日の観客が感じるノスタルジーと、当時の観客の暗黙の前提（交通機関（路面電車とポンポン船）や橋（勝鬨橋・相生橋）など）とを区別することも可能になるだろう。

（文責 村井まや子）

# 文 献 解 題

昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集

1. 文献名：『昭和戦前期 プロレタリア文化運動資料集』（DVD 2枚）
2. 編者：昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会
3. 出版社：丸善雄松堂
4. 出版年月：2017年9月

1920～40年代に発行、作成、配布、発信されたプロレタリア文化運動・左翼演劇に関する、ビラ、チラシ、ニュース、檄文、パンフレット、ガリ版刷りの稀少雑誌、色鮮やかなミニポスターなど、多種多様な各種資料2857点をまとめてデジタル化、9分類して検索と閲覧を可能にした、第一級の資料である。

昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会のメンバーである浦西和彦氏所蔵資料にくわえ、市立小樽文学館所蔵（池田寿夫旧蔵）資料、法政大学大原社会問題研究所所蔵資料、札幌大学所蔵（松本克平旧蔵）資料から成るこの資料集だが、特徴として次の3点を強調しておきたい。

1つは、これらの資料が、ということはつまりは、プロレタリア文化運動自体が、「文学・演劇・映画・美術——ジャンルを横断する総合芸術運動」だという点である。文化運動をジャンルで分節することなく集成した本資料は、利用者の立場からすると、多くの専門領域にとって有用だといえる。逆に、1つの興味からこの本資料にふれれば、同時代に展開されたさまざまなネットワークが、文字通りジャンル横断的に立ち上がって来る、というわけだ。

もう1つは、エリアの広がりである。プロレタリア文化運動がプロレタリアートとの関わりの中で生み出されていく中で、「地方」は重要なエリアである。さらに、プロレタリア文化運動は、諸外国からの影響の中で展開されたものである。してみれば、本資料は国内／外にわたって、視野をひらく手がかりともなる。

最後に、昭和戦前期の文化・芸術・歴史は、戦争の「負」の面ゆえに研究対象として忌避されてきたきらいが、いまだ払拭されていないと思われるが、しかし、今日からみても意義深い事象に満ちている。その解明のためにも、本資料は有意義なものだといえる。

（文責 松本和也）

1. 文献名：『絵葉書で見る近代朝鮮』①～⑦
2. 編者：浦川和也（企画・監修：崔吉城）
3. 出版社：民俗苑
4. 出版年月：2017年5月

7分冊になっている本書は、「名護屋城博物館」所蔵の朝鮮半島絵葉書を全点掲載した資料集である。本書は、絵葉書研究はもとより、韓国に関する学問の基礎資料の1つとして学術的価値が高い。日韓両言語で編まれているため、韓国に興味を持っている人は韓国語の表記も参考にしながらページがめぐれる。看板やポスターなどから当時の書き方や表現をうかがい知ることもできる。

7冊は下記のように分類されている。北朝鮮の地域を対象としている④は貴重な資料である。

- ①記念葉書等
- ②名所葉書：京城1
- ③名所葉書：京城2・京畿・忠清・江原道地域
- ④名所葉書：平壤・黃海・平安・咸鏡道地域
- ⑤名所葉書：釜山・慶尚・全羅道地域
- ⑥風俗葉書
- ⑦修学葉書・その他の葉書

(文責 尹亭仁)

## 所員自著紹介

1. 書名：『マーカス・ガーヴェイの反「植民地主義」思想 パンアフリカニズムとラスタファリズムへの影響』
2. 著者：小倉英敬
3. 出版社：搖籃社
4. 出版年月：2017年7月20日
5. ページ数：258頁

19世紀末にジャマイカに生まれたマーカス・ガーヴェイ（1887～1940）は、同島に定着した黒人バプティスト教会やアフリカ系宗教・文化の影響を受けて、反「植民地主義」的な姿勢から、ブラック・ナショナリズムと「アフリカ帰還」の思想を形成し、1914年に世界黒人地位向上協会（UNIA）を設立した。ガーヴェイは、1916年に渡米したが、第1次世界大戦後の米国における黒人を取り囲む流動的な情勢と相まって、UNIAは1919年以後米国、カリブ諸国、アフリカ諸国に組織を拡大し、世界初の環大西洋的な黒人解放運動に発展した。

ガーヴェイは、1927年に米国を国外追放された後、1940年にロンドンで死去したが、その思想的影響は、パンアフリカニズムやラスタファリズムの展開を通じて、米国、カリブ地域の黒人解放運動、アフリカ諸国の独立運動に大きな影響を残した。特に、ジャマイカではガーヴェイの黒人精神の覚醒と「アフリカ帰還」を模索する思想は、1930年代に形成されたラスタファリズム、1960年代末に登場したレゲエ音楽に影響を与えた。また、1990年代以降に米国やカリブ海諸国に高まつた奴隸制に関する賠償請求運動や、黒人の生命尊重の主張にガーヴェイの影響が見られる。本書は、グローバル・ヒストリーの視点から、このようなマーカス・ガーヴェイの反「植民地主義」思想の全貌解明を試みた。

（小倉英敬）

1. 書名：『破壊のあとでの都市空間——ポスト・カタストロフィー』の記憶
2. 著者：熊谷謙介（編著）
3. 出版社：青弓社
4. 出版年月：2017年3月
5. ページ数：366頁

日本において記憶の歴史学・表象論が脚光を浴びたのは、1995年以降であったようと思われる。戦後50年を迎えて記憶の継承や歴史修正主義が問題となり、『ショア』が日本公開され、戦争やアウシュヴィッツの「証言」をめぐり議論が巻き起こった時期である。

それから20年余り経ち、現在問いかけられているのは、けっして「記憶か忘却か？」といった二者択一のものではない。市民の日常を不安に陥れる事件が繰り返され、311などの巨大災害を経験した時代にあって、「記憶の義務」という掛け声だけでは解決することができない問題が起こっている。失われたものをどのような表象様式によって浮かび上がらせるか——、さまざまな芸術作品や都市のプロジェクトを通じて見ていく必要がある。

本書はそうした問い合わせへの応答の試みである。平安末期の京都から関東大震災後の東京まで、リスボン大地震後の思想家たちの考察から、パリで繰り返される革命の後に残されたものまで、南北戦争といった内乱から、世界大戦後のベルリン・ローマまで、さらにはロサンゼルスや香港におよぶ20世紀の災害と戦乱の歴史を、「カタストロフィー」という概念でまとめながら、その「あと（後・跡・痕）」の姿が描かれていく。そこに見られるのは普遍的な答えではなく、それぞれ、ある時代・ある地域で実践してきた人間の営みなのである。

（熊谷謙介）

1. 書名：『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術／戦場』
2. 著者：松本和也
3. 出版社：神奈川大学出版会
4. 出版年月：2018年2月（予）
5. ページ数：400頁（予）

本書は、タイトル通り、日中戦争開戦後の文学場に関する考察を、報告／芸術／戦場という3つの視角から展開した9本の各論に、方法論に関する補論を付した研究書である。もう少し具体的にいえば、昭和12年7月7日の日中戦争開戦以降、主にはその直接的・間接的な影響によって、文学者-文学作品-トピック-その他関連する文学活動にどのような展開（変化）が生じたのか、日中戦争を閑数とする時局がどのように関わったのか、また、その帰結としてどのような新たな問題が生じたのかなどについて、文学場の特徴がよく示されたと思しき複数の切り口から検証したものである。

そういった一連の問題系を、主には当時の新聞・雑誌上の文学関連言説の、あたう限り広範な調査・分析に即して、言表された限りにおける文学者の言動や作品、評価軸の変動について考え、各論として論じたものの集積が本書である。

なお、本書は神奈川大学出版助成Aに採択されて出版の運びとなったものである。関係各位に、この場を借りて、御礼申し上げます。

（松本和也）